

秀賞

10年後の私へ

青森県青森市立佃中学校

3年 福田 椿

「あなたは自分のことが好きですか。」

この問いに対して私は今、「はい」と答えることができない。

夕食後、いつものようにネットサーフィンをしていると、「学生に向けたアンケート」というサイトが出ていた。少し興味をひかれ、アンケートに回答していく中、この質問に手が止まった。

「あなたは自分のこと好きですか。」

はっきりとした理由が思い浮かぶわけでもない。しかし、なんとなく自分のことが好きだと言えない。なぜだろうと考えるうち、ふと、同じラグビースクールに通っていた先輩のあやかさんとの会話を思い出した。

5年ほど前、6歳年上のあやかさんと高校進学の話をしていた。

「椿は高校どこ行くの？」

小学生の私は、自分の実力も知らずに県内トップレベルの高校名を口にしていて。学力の高い高校へ入ることが誇りだと思っていたからだ。それを聞いたあやかさんは目を丸くした。

「すごいね、椿。あやかには無理だあ。」

彼女が通うのは、市内で学力レベルは中堅と言われている、ラグビーの強豪校だった。そのときの私は、自分のほうが優れていると、優越感に浸っていた。しかし、その後の父との会話で自分の未熟さを思い知らされた。

「あやかは県内トップレベルの高校に入れる学力があったのに、この高校に入ったんだよ。周囲には反対されたけれど、ラグビーがしたいからって、自分で決めて入学したんだ。しかも、入学したあともちゃんと勉強して成績をキープしてるんだ。入りたい大学に合格するために。」

私は、学力レベルだけで判断していた自分を恥ずかしく思った。自分の好きなことがあり、それを高める道を自ら選択して努力できるあやかさんはカッコいい。私も自分のことに正直に行動できる人になりたいと思った。

父と会話した、あのとき、たしかにそう強く思っていた。しかし、私は何も変わることができずにいた。私には好きなことに向かって手をのばす勇気がなかった。それをずっとつかみ続ける自信がなかった。私はもともと勉強が好きで、できたら学力は高くありたいと望んでいた。そして、周りから認められたいと思っていた。もし、別の道を選んで失敗したら、誰も私に目を向けず、近

寄りさえしないのではないだろうか。そんな幼い価値観の殻が破れ始めた。

私は学んだ。自分の外面を取り繕って人に好かれるのでは、なんの意味もない。自分の心に正直に行動し、自分を内面から好きになることで初めて人からも好かれる。今、私が自分を好きだと言えない理由はそこにあるのだろう。

私は今、以前よりもさまざまなことに挑戦しようと心がけている。学校では少年非行防止 JUMP チームに加入し、その中で行われているボランティアなどの地域活動に積極的に参加している。ラグビーでは、東北女子のチームに入り、県外の選手と練習し、コミュニケーションを取りながら刺激をもらっている。あやかさんにとってのラグビーのように、自分が熱中できるものを探すための活動だ。最近、自分に自信がついたような気がする。きっと、目指すべきものを探し、自ら行動できているからではないかと思う。将来いつか、かけがえないものと出会い、当たり前のように自分の足で力強く向かっていける日がくることを願って。

10 年後の私へ

24 歳になったあなたは、どんな生活をしていますか。自分の夢に向かって歩んでいるでしょうか。今の私が望む、ステータスを求めず、自分に正直な生き方はできていますか。私の考え方を覚えてくれたあやかさんは、志望大学に合格し、夢をかなえるための勉強をしながらラグビーを続けています。好きなことを追いかける中で、自分の弱いところも好きだと思えるようになることを願っています。14 歳の私が答えられない問いに、自信をもって答えてくれることを望んで尋ねます。

「あなたは自分のことが好きですか。」